

黒積俊夫先生の人と学問

山田 弘明

略歴・研究業績

先生の略歴と研究業績について、いただいた資料とインタビューを元に再構成すれば次のようになる。[]内は山田の付加である。

昭和12 (1937) 年3月6日、東京に生まれる。本籍地、長崎県。

[先生は東京のお生まれだが、もの心がついて以来ずっと博多で育ちになった生粋の九州男児である。小学校2年生のとき空襲疎開の経験をお持ちである。]

昭和30年 3月 福岡県立福岡高等学校卒業

30年 4月 九州大学文学部入学

35年 3月 同 哲学科(哲学哲学史専攻)卒業

[のちに東大教授となった今道友信、黒田亘助教授(当時)をはじめとする先生方の指導を受けた。ちなみに、ご趣味は野球・将棋である。]

35年 4月 九州大学大学院文学研究科(哲学哲学史専攻)修士課程入学

37年 3月 同 修了

37年 4月 社団法人「徳島新聞社」編集局入社

38年 1月 同 退職

38年 4月 九州大学大学院文学研究科(哲学哲学史専攻)博士課程入学

41年 3月 同 単位取得退学

41年 4月 日本学術振興会奨励研究員(昭和42年3月まで)

42年 4月 東亜共立大学非常勤講師(昭和42年9月まで)

42年 10月 DAAD(ドイツ学術交流会)奨学生としてドイツ・ボン大学に留学(昭和44年9月まで)

[カント研究の権威であるゴットフリート・マルチン教授に師事して、ディセルタチオン論文を準備。同じ教室に、ハビリタチオンを準備中のゲロルト・ブラウスがいた。]

- 44年 10月 九州大学教養部講師 (哲学担当)
45年 4月 同 助教授
53年 3月 名古屋大学文学部助教授に配置換え (西洋哲学史講座担当)
[当時、文学部哲学研究室の専任は大鹿一正教授のみであった。]
57年 12月 同 教授 (哲学講座担当)
平成 6年 5月 博士 (文学) 九州大学
[提出論文『カント批判哲学の研究—統覚中心的解釈からの転換—』による]
12年 3月 停年により退職
[文学部における勤務年数は 22年 1ヶ月の永きに及び、3月の名古屋大学評議会で名誉教授の称号授与が決定した。]

I 著書

- 1 『カント批判哲学の研究—統覚中心的解釈からの転換—』
名古屋大学出版会 平成 4年
- 2 『カント解釈の問題』 溪水社 平成 12年

II 論文 (著書に入っていないもの)

- 1 純粹理性批判と形而上学の問題
『哲学論文集』(九州大学哲学会編) 第一輯 昭和 41年
- 2 ロックにおける言葉と知識
『言語科学』(九州大学教養部言語研究会編) 第 10号、昭和 49年
- 3 物の認識について—批判前期カントの場合(上)
『テオリア』第 18輯、昭和 50年
- 4 物の認識について—批判前期カントの場合(中)
『テオリア』第 20輯、昭和 52年
- 5 批判哲学と知識学との差異
『名古屋大学文学部研究論集』哲学 30、昭和 59年
- 6 自我について
『中部哲学会会報』第 17号、昭和 60年

- 7 行為の哲学とその限界 — 前期フィヒテ知識学の一考察 —
『名古屋大学文学部研究論集』哲学 34、昭和 63 年
- 8 世界観と時間
『時間 — 人間とのかかわり』(名古屋大学放送講座) 平成元年
- 9 カントとハイデガー
『カント哲学の現在』(世界思想社) 平成 5 年
- 10 「何故?」と「何のために?」 — アンスコム「実践知」論の検討 —
『名古屋大学文学部研究論集』哲学 42、平成 8 年
- 11 経験論哲学と哲学的経験論との間 — ロック・カント・シェリング —
『名古屋大学文学部研究論集』哲学 46、平成 12 年
- 12 ヘーゲルからカントへ
『西洋哲学におけるアイデアリズムの問題史的研究』(平成 9 年度～平成 11 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書) 平成 12 年
- 13 Von der transzendenten zur immanenten Philosophie — Zum wahren Kantsverständnis, *Akten des 9. Internationalen Kant-Kongresses*. 平成 12 年
- 14 Kants Transzendentalphilosophie als die immanente, *Proceedings of the Twentieth World Congress of Philosophy*. 平成 12 年

III 書評・紹介・「事典」執筆

- 1 山本清幸『シェリング自由論の哲学』
九州大学文学部同窓会『会報』、昭和 47 年
- 2 ゲロルト・ブラウス『カントにおける現象』
東京大学新聞 1242 号、昭和 55 年
- 3 牧野英二『カント純粹理性批判の研究』
京都ヘーゲル讀書会編『ヘーゲル學報』第 2 号、平成 4 年
- 4 『カント事典』(弘文堂) 平成 9 年
3 項目執筆

IV 口頭発表(主要なもののみ)

- 1 日本カント協会 第 2 回大会シンポジウム 昭和 52 年
- 2 中部哲学会 第 27 回大会シンポジウム 昭和 59 年
- 3 日本フィヒテ協会 第 3 回大会シンポジウム 昭和 62 年

- 4 中部哲学会 第32回大会シンポジウム 平成2年
- 5 九州大学哲学会 年次大会特別発表 平成4年
- 6 日本カント協会 第17回大会特別報告 平成4年
- 7 日本哲学会 第52回大会特別報告 平成5年
- 8 第6回日本学術会議 哲学系公開シンポジウム 平成8年
- 9 第20回世界哲学会議(米国・ボストン) 平成10年
- 10 第9回国際カント学会(ドイツ・ベルリン) 平成12年

V 所属学会等(旧または現在の役職)

- 日本哲学会(委員、編集委員)
- 日本カント協会(委員)
- 日本フィヒテ協会(委員)
- 中部哲学会(委員長)
- 西日本哲学会(委員)
- 京都ヘーゲル讀書会(編輯顧問)
- 名古屋大学哲学会(委員長)
- 九州大学哲学会(委員)

文部省学術審議会専門委員(科学研究費補助金・第1段審査委員)平成8・9年度

日本学術会議第16期哲学研究連絡委員会委員

以上のほか、先生は次のような各種専門委員として日本の学術文化行政や名古屋大学の運営に参画されている。

教科用図書検定調査審議会調査員 平成8年～9年

名古屋大学組換えDNA実験安全委員会委員 平成3年～5年

名古屋大学教養部改革第三次検討委員会専門委員会委員 平成4年

名古屋大学共通教育教務委員会委員 平成6年

名古屋大学共通教育実施運営委員会委員 平成6年

名古屋大学文学部哲学科長 平成5年～6年

その他、文学部教務委員長、入試総合判定委員会委員、入試委員長など。

非常勤講師として学外で集中講義をされた大学は、京都大学、九州大学、広島大学、金沢大学などに及んでいる。

先生の学問

先生の学問について一言しておく。先生のご著書からも分かるように、先生の専門は 18 世紀ドイツのカントを中心とする西洋哲学であるが、ひろく現代哲学や倫理学についても積極的な提言をされている。いま先生のカント研究の特徴について言えば、これまでのカント解釈を根本的に批判し、厳密に実証的な立場から独自の解釈を提示したことにある。大きく分けて、理論哲学と実践哲学（倫理学）と、二つの論点がある。

(1) カントの理論哲学の根本問題は、経験がいかにして成立するか（ひとがものを客観的に認識することがいかに根拠づけられるか）である。先生は、経験の成立のためには、統覚（意識を統一する機能）といったような経験に先立つ超個人的主観は必要でなく、経験的個人的主観があればよいと考える。かくしてフィヒテ以来の統覚中心的解釈の誤りを指摘し、経験はロゴス（ことば、判断）によって基礎づけられるとする。こう解釈することによって「物自体」を拒否することなくカントを整合的に理解できることになる。また経験の成立を説明する原理として、ヤコービ以来の学者がなしたように経験を超えたものに求める超越論的解釈をとるのは誤りであると見る。超越論的（transzendental）とはむしろ先験的ないしは「経験に内在する」の意であって、カントの経験理論は、すでに存立している経験を出発点とする内在論であると解釈する。

(2) 実践哲学（倫理学）については、従来カントの倫理学は定言命法や義務を唯一原理とする形式的な規範倫理学とされる。しかし先生は、それは倫理学の基礎論のことであり、その上に立つ本体は、アリストテレス的な実質的な価値倫理学（個別的・不文的・実践的知）であると指摘する。内在論をとることによってカント倫理学は、スピノザのように理論体系の一部分ではなく、独立の実践的学問たりえると考える。

先生は、こうした斬新で独創的な解釈を日本の哲学会やボストンの国際哲学会で発表してきたし、この 3 月末にはベルリンの国際カント学会で研究発表される予定である。その解釈自体、これまでのカント哲学の研究史の書き替えを迫る大きな業績である。だがそれと同時に、内在論へと開かれた解釈は、意識を中心とする超越論的思考の行き詰まりから来る（と先生は看破される）現代の哲学と倫理学との低迷に対して、その復興の道を示す重要な指標にもなっている。この点に先生の全研究の意図が収束していると考えられる。

講義内容一覧

昭和53年度から平成11年度まで、先生が文学部で行った主たる授業内容を掲げる。「演習」と「講義」とがある。「演習」で取り扱った書物は次の通りである。

I. Kant : Kritik der reinen Vernunft

J. G. Fichte : Grundriß des Eigentümlichen der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen 1795.

----- : Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre

F. W. Schelling : Darstellung meines Systems der Philosophie

G. W. F. Hegel : Differenz-Schrift

----- : Glauben und Wissen

----- : Phänomenologie des Geistes

H. Rickert : Der Gegenstand der Erkenntnis

M. Heidegger : Sein und Zeit

「講義」では主として「哲学概論」を担当された。各年度におけるその全内容を次に示す。[] は山田による挿入である。

昭和53 認識論の諸問題について考察する。

- 54 存在と知識という哲学の根本問題を経験という問題場面に定位して考察する。
- 55 判断論を手がかりにして、認識の諸相（経験、道徳、審美）とそれらの関連について考察する。
- 56 哲学の体系における問題と立場と方法の関連を実例に即して具体的に考察する。
- 57 理性主義と経験主義という対比を通して理論哲学の諸問題を考察する。
- 58 前年度の続き。
- 59 西洋哲学の伝統的なイデアリスムスに焦点を合わせて、哲学の主要諸問題を考察する。
- 60 自由論の諸類型を手がかりにして、理論哲学と実践哲学の関連を考察する。
- 61 理論哲学と実践哲学の紐帯としての自由の問題を、自由論の可能性という見地から考察する。（前年度の続き。）

- 62 哲学形成の両極とも言うべき経験と理性、反省と思弁の絡み合いを哲学史の具体的局面に即して考察し、哲学の根本問題を浮き彫りにする。
- 63 〈経験と経験を根拠づけるもの〉という主題をめぐって、哲学体系の原理と可能性と限界について考察する。
- 平成元年 道徳の最高原理の探求を主題として、関連する歴史哲学および社会哲学の諸問題についても考察する。
- 2 〈意識の哲学〉と〈言語の哲学〉という対比を通して、哲学成立の可能条件を考察する。
- 3 自由論を要石として、理論哲学と実践哲学の関連を考察する。
- 4 哲学概論。
- 5 従来認識論の過度の心理学的傾斜を反省し、新たな哲学的認識論の構築を試みる。
- 6 言語以外の、哲学に必要不可欠なもの（言語を超えたもの、語られ得ぬもの）と言語との関連を哲学史における諸事例に即して考察する。
- 7 思索も一つの行為と見るなら、理論哲学と実践哲学とを統括する行為の哲学の理念が成立しよう。現代の行為論を手がかりに、理論と実践の区別の根源性等、行為の哲学の諸問題について考察する。
- 8 倫理学概説。アリストテレスとカントという、西洋の倫理学の二大源泉に遡って倫理学の本質について考察する。[この年は倫理学概説を担当]
- 9 哲学の本質。デカルト・カント（二元論）vs スピノザ・ドイツ観念論（一元論）という対立図式における真の対立点を明示した上で、哲学の本質をめぐって考察する。[この年は哲学特殊研究を担当]
- 10 哲学の本質。哲学体系の本来とるべき形態は超越論（経験超越論）か、それとも内在論（経験内在論）かという問題を、哲学史に即して考察する。
- 11 哲学の課題。ドイツ観念論以後、哲学は衰退の道を辿りつつあることを、様々な理由を挙げて指摘する。カントへの誤解を解いて、〈超越論〉から〈内在論〉へと転換することが、哲学再興の道と

論じる。

付記

最終講義について。

平成 12 年 1 月 19 日 (水) 11 時～12 時、黒積先生の最終講義が文学部第七講義室で行われた。若尾学部長の挨拶、山田による履歴・業績紹介のあと、先生は教壇に立たれ、「哲学再興の途」と題する力のこもった講義をされた。それは、これまでのご研究の総括とも言うべき壮大な構想を提示し、満員の聴衆に感銘を与えるものであった。最後に花束が贈呈され、万雷の拍手のなかを先生は泰然として講義室をあとにされた。

ひき続き、小ぎれいに準備された哲学読書室で、先生を囲むカクテル・パーティが開かれた。40 人を超える関係者が集い、ワイン・グラスを傾けながら和やかな歓談のひとつきをすごした。